

日本企業のグローバル競争力の再考

——企業財務データによる経營業績の国際比較——

黄

磷

本論文は、日本企業のグローバル競争力とその基盤を国際比較分析という切り口から再考することを目的とした研究プロジェクトの成果の一部である。日本企業とそのライバル企業との異同を実証的に解明するために、米国やイギリスなどアングロサクソン企業、ドイツやフランスなどコンチネンタル企業だけでなく韓国、台湾、中国とインドのアジア企業の財務データベースを構築し、海外事業の比較もできるようにしている。本論文では、個別企業の競争力指標である総売上高営業利益率（ROS）と総資産経常利益率（ROA）に関する国際比較の分析結果を示している。まず、日本上場企業の事業効率も資産効率も2007年からやや低下傾向にあることが確認された。そして、上位優良企業と下位劣位企業の間と同様な変化、すなわち変化連動性が認められる。さらに、利益率格差に関しては、日本企業は欧米企業と対照的に異なるが、アジア企業とは共通して格差が小さいという結果も得られた。海外に所有または支配している上場企業に関する国際比較の分析結果からは、日本企業の海外事業の事業効率が相対的に悪く、その資産効率が米国企業に劣ることがわかった。この分析結果は安定成長を実現する企業能力という日本企業の強みを海外市場でも発揮するために、外部の経営資源を活用して事業効率と資産効率を向上させる新たなバリュー・ネットワークの構築の重要性を示唆している。

キーワード グローバル競争力、経營業績、事業効率、資産効率、海外事業

1 はじめに

本論文では、日本企業のグローバル競争力を1997年から2009年までの企業財務データによって事業効率と資産効率の国際比較という視点から分析し再考している。これは日本企業のグローバル競争力に関する研究成果の一部である。研究プロジェクトの全体的なねらいは企業財務データによる経營業績とその説明要因に関する分析という方法を用いて、世界における日本企業とそのライバル企業との異同を実証的に解明しようということである。

企業の競争力に関しては、多くの研究がなされてきた。20年前の世界における日本の製造業の強さに対する称賛および驚異と対照的に、今日の日本企業、とくにグローバル競争力が高いとされてきた業種でも世界でのマーケットシェアが低下している。ここでいう企業のグ